

私と彼が出会ったのは、私が大学生の時だ。私は大学に入学すると同時に其のバイトへ這入ったので、彼がバイトを始めた時、私は既に三年めというベテランだった。彼は這入った当初から、おやと思わせる才腕の持主だった。

接客業で重要なのは、矢張り笑顔だろう。彼は一目する限そう花やかな印象を与えないが、笑うと非常に人好きのする顔をしていた。御客と接する時、彼が笑顔^たを絶やすことはない。彼の笑顔に釣られ、不機嫌そうな客が和やかに帰って行く光景を、私は屡見た。

失策も少かつた。とは言え、新人なので、完全な仕事を遂げることにはできない。しかしその失策を最小限にすることはできる。彼は非常に慎重な質だった。それでいて、処理をする能力が十人並でなかった。結果として仕上がるのは他の新人よりすこし早い程度だったが、彼が慣れるにつれ、其差は歴として仕事に映ずるようになった。

私が彼に信を置くようになったのは、同僚として当然のことと思う。高がアルバイトと思われるかもしれないが、アルバイト同士でも、連帯感があった。その中の出来不出来で、或人への信頼が薄れることも、実際にあつた。自から言うのは恥ずかしいし、倨傲ましいのも承知しているが、私も仕事ができる部類の人間だった。だから、私は彼が入って来たのを、嬉しく思った。

彼は至ってまじめだったが、夫は仕事を

に於おいてで、仕事がおわれれば実に剽ひょう軽きんな質たちでもあった。私は冗談を解すのは現代人としての嗜たしなみであると思つてゐるのだが、彼は、この嗜たしなみをじつに堅固しつかりと具そなえていた。私が斯こう言えば、彼は斯こう反かえす。夫それは通俗の滑稽を演じてゐる気分で、私は逢あつてまだ一カ月しか経たない彼と、バイト場の同僚を笑わせた。

彼も、私に対して似た様ような感興を抱いて呉くれていたものと、私は信じた。私達は、携帯電話を持たないような超俗の人ではなかつたが（又また、私は其そのような超俗には意味がないと推断する、）携帯電話の繋つがりに重きを置いていなかつた。私は、未いまだに、私と彼が携帯電話の番号を交換しなかつたことを、誇りのように思つてゐる。その結果として、私と彼はいま繋つがりを完全に失なくして仕舞しまつたわけだが、そんなのは瑣さ細さいな事象であるだろう。

私と彼が道をとも俱にしたのは、僅わずか半年
足らずのことだった。しかし私は其その半年
を通常のものより、幾分か特殊なものと
して記憶している。左して彼終りのこと
を。私は彼の事を思い出す時、必かならず彼
終りに思い及んで、ことの当否を今も考
えずにはいられない。彼が与えた愛の損
傷あいた、あれははたして、一いっ體たいどれほどの
日月彼女の胸に残り得ただろうか？
憐れむこともある。

二

私と彼が私事しじについて話し合ったのは、
アルバイトの数人で行った飲会のみかいの席がは
じめてだろう。私は大学生で、数カ月先、
就職活動を控えていた。私は早計てつきり彼も大
学生だと許思ばかりっていて、彼に今何年生か
と訊きいた。彼は瞬間苦々しい顔をして、
実は、退やめたんだと答えた。私は驚いた。

ああ、じゃあ、フリーターか。歳を聞くと同じ歳であることがわかった。私はフリーターに関して何らの感情も有^もっていなかった。というより、就職活動の成果次第では、自分もフリーターだな、とさえ思^しっていた。

暫^{しば}らくは一身上の話をした。もう一つ彼に就^ついて驚いたのが、彼はひとり暮^{ぐら}しをしているといふ点だった。もちろん、大学の友達で地方から出て来ている人もいた。然^{しか}し彼は実家から駅で三つしか離^はなれていないのに、一人暮^{ぐら}しをしていた。理由を訊いたが、彼の答えは不^ふ分^{ぶん}明^{めい}だった。彼は恥^ちずかしそうに答えを籠^こらせた。なんだか、居^いづらくてね。自分がフリーターなのに、養^{やし}なってもらうのも情^{なさけ}ないし。私はフリーターにな^いまったことがないので、其^その気もちが今^{いま}一^{いち}わからなかった。私はなぜ就^く職^ししないのかと彼に聞^きいた。ひとり暮^{ぐら}しをするなら、経済的に其^そ方^ちの

方が楽なのでは、という積りつもで聞いた丈だけだこたえった。なんか、むりなんだよね。彼の答こたえは単簡たんかんだった。おれは、長続きしないんだ。仕事も、慣れてくると、時々無性に嫌になるんだ。おれは、いつまで、ここにこにいるんだろうって考えちゃってさ。私は辣腕家らつわんかとしての彼を思い浮かべていたので、この答こたえが彼の意外な面を見せたように感じられた。

彼の仕事の出来、又また会話の習熟度から、私は自信家のように彼を予想していた。しかし実際は違った。彼は何事につけ弱気、といって程自分に自信をもつていなかつた。其源因そのげんいんは何なんなのだろうと考えたが、まだ知己しりあつたばかりの私では、無論突き止められなかつた。唯ただ彼は浮薄ふはくな話になつた時だけ、明るく振る舞つて私達そのを笑わせた。

其日そのはそれ限りきだった。しかし私は、アルバイトで彼と同じ日に働はたらいた時、

屹度きつと一所いっしょに帰るようになった。彼と帰るのは楽しかった。四人程で帰っても、私と彼が重おもに喋舌しゃべることが多かつた。其所せ為いで、私は今迄冗談を言い合っていた別の同僚に、不足を感じる様になつた程だった。彼と私は、夫れこそ知己ちぎであるように、御互おたがいの感覚を一致させることができた。

彼とは飲んだ日以来、突込つっこんだ話しをすることなくすぎた。私は別にかまわなかつた。この時は、彼が遠からず罷やめることなど抔な知らなかつたし、私は一種の信頼感に満足していた。敢あえて言葉にはしない軽微な依頼心。それに、酔っていたのかもしれない。然しかし今もう一度チャンスが与えられて、彼と心ゆく迄まで話ができるとしても、私は似たような中身のない話で日々を過すごすだろう。彼とそういう話はなしをするのは、本当に楽しかつたから。

みてしまった時、へえと思った。みてしまった、とはいっても、隠していたわけでもないのだから、罪のないことと思う。私は秋山さんが帰るのを見届けて、彼の肩を狎々なななしく抱いた。なんだ、秋山さんのこと、好きだったの？ 彼は一瞬劇はげしく狼狽した。いや、好きっていうか、まあ。言葉を渾にこして、追窮ついきゆうから逃れようとする。

秋山さんは、女性のアルバイトで、年齢としは私達より一歳上ひとつだった。見た目は、まあかわいい。とはいえ、誰が見ても美人というタイプでもない。秋山さんの勤務は、きょうが最後で、是これから大学の卒業論文に集中、その後内定の執とれた企業に入る日まで、暢のんびりするとかいう話を聞いた。私が聞いた訳ではない。比較的秋山さんと仲の好い女の子から、聞いた。

彼女ほぼは、変わった人だった。飲会のみかいには、略来ほぼない。多勢が嫌いとかいう話はなしも聞きくが、真偽は知らない。夫それでいて愛想のいい人だった。仕事も出来る。しかし、帰る時は大抵一人でそそくさと帰る。私は彼女が抜けるのは痛手いたでだなと勘定しただけで、他ほかには関心をもっていなかった。白状するが、私は経験豊富というほど、女性を知らなかった。しかし此時で三人程の女性と肌を合わせたことがあり、女を知らないという人間と出逢うと、大體たいてい優越感を得た。彼の自白を聞いた時も、同様だった。彼は、まだ女性と手を絆つないだこともないのだと言った。私は優越感と共に、驚おどろいた。彼は、決して悪い顔をしていないし、先もいったが弁舌べんぜつも軽やかだった。二十年生きていて、（其半その分以上は意味のない期間だが）女性と深く関わる機会がなかったのだらうかと怪しんだ。彼は恥はづかしそうにむいてないん

だろうねと答たえた。いつも、好きになる丈で、好きになってももらえないんだ。努力が、足らないんだろうな。彼がいつもの軽妙な調子でなく、そう言っているのを聞くと、私はふしぎな感情に打たれた。

彼が秋山さんの最後の勤務の日、電話番号を訊いたのも或は勇気を振り絞ったのこともかもしれない。しかしそこは彼に聞いてみなかったもので、確証はない。ともかく彼は秋山さんに番号を訊いた。私はその場面を目撃し、彼の恋情を知った。正確には、恋情の一端か。携帯電話の番号を訊くことが恋情のいる行為だと、私はそれ迄考えたことがなかった。しかし其後の彼の話しを聞くと、そういうこともあるのだろうと思うようになった。彼は純一だった。そのことを旨く伝えられるかは甚だ心基ないが、私は私の精神に懸けて、其事を受け合いたいと思う。

彼は秋山さんに番号を聞いて、会う約束を取り付けた。俱ともに飲むという夫丈それだけのことが、彼には余程よほど嬉しかったものとみえる。彼は嬉しそうに私にいった。別に、飲んだ丈だけで何どうにかなるとも思っていないけどさ、なんだろう、嬉しいんだ。彼の笑顔は私を喜よろこばせた。私はまだちゃんと彼の恋情を知らなかったので、落おとして来いよ、と冗談混じりに言った。彼は苦笑した。何どうかな、おれには、好きって伝えることしかできないから。私は最初調から戯かっておきながら驚おどろいた。秋山さんのこと、好きなの。私のこの発言に、今度は彼が驚おどろいた。好きだから、番号訊いたんじゃない。私は女の子の番号を聞くというとくに重味おもみのない作業と、恋情とが結び付けられなかった。

彼は自分に経験がないことを恥じていた。二十にもなつて、情けないよな。彼は言った。いま迄までも、好すきになつた人はい

るけど、俺ことごと悉くふられてるんだよね。
だから彼女いたことなくて、男女の機微きび
みたいなもんが、分からないんだ。つき
合ってる人みると、何でお互たがいの好きが重
なるんだろうって、ふしぎに思う。好き
な人に好きになってもらう、こんな難むずか
しいことないんじゃないかって気が俺は
するのにな。私は経験者として、彼に答え
得なかつた。私は好きか何どうかに重点を
置いたことがなかつた。一いつ所にいて楽らくか
何どうか、面倒じゃないかを考えることな
らあつた。恐らく、私が恋人に囁ささやく好
きと、彼の好きは、別な物なのだろうと
思った。私は道徳者でないものでそれを慙は
じることはしなかつた。但ただ彼への優越感
は溶けて消えていた。

彼と話すのは面白かつた。私と彼が別
種の人間なのだと分わかけると、興ま趣すは益増ますし
た。私は彼の恋情れんじょうを応援した。旨うまく行け
ばいいと心から思った。彼と彼女が飲ん

だ次の日、私達は共にバイトに這入って
いた。

四

彼の興奮振りは私を愉快にさせた。只、
最う、うれしくてさ。話しながら彼は赧
れた。俺れは、受け容れられたこともな
いんだ。ずっと入口にも入れなかった。
或意味、俺が今迄好きになつた人は、
ちゃんと俺の気もちを拒否してくれた訳
だけど、矢つ張り凄らかつた。適当につ
きあつたりされるよりは増だと思つたけ
ど、好きな人を、好きでいれないのはつ
らいから。彼が話すのをきいて、私は
身中にうれしさが充ちた。

彼と彼女の会合は、成功におわつた。
とはいつても、二人がつき合う杯の、明
瞭な結果が出た訳ではない。彼は二人で
飲んだ最後、彼女に好きだと告げた。突

然こんなこと言われても、俺のこと好きになれる訳はないと思う。だから、これから二人で遊ぶ内、もし好きになつてくれたら俺は凄く嬉しい。俺のことは絶対好きになれないっていうならここで諦めよ。でももしそうじゃないんなら、また二人で会ってくれないかな。彼は誠心を露出した。

彼女は少し悩んだ。然し、私は未M君(Mとは彼のことだ)の事可く知らない。だから、これから、知って行きたいな、と嬉笑んだという。

彼は有頂天になつた。好きな人に、好きっていえる事が、此んなに嬉しいとは思わなかつた。俺れは幸福だ。彼氏じゃないし、好きになつてもらえてもいないけど、好きだつて、あの人にいえるんだ。彼は夢中で喋舌つた。

彼は次回の約束も取付けた。映画にくという。私は、彼の上機嫌を語るのが

忍びない。彼は、其映画に行つた日、彼女と又種々な話をした。中には、クリスマスのお話も出て、彼は一所にすごせないかと聞いて見た。案に反して彼女は即座にいいよと答えたという。え、いいの？ 思わずきき返して仕舞たという話を聞いて、私は笑つて了つた。彼氏じゃないのに、という気持があつた為なのだろう。しかしそれどころか彼女は、今度は彼の宅に料理を作りに行きたい、と申し出たという。殆んど自炊をしない彼は一も二もなく賛成した。俺のあの殺風景な部屋に、女の人があるなんて考えたこともなかつた、と彼は私に言った。

私は彼の喜びようを目の前で見ている。始めて、好きな人に好きになつてもらえるかもしれない、と期待や実感を込めて吐露したのも、私は聞いた。然し此話の続きを知つていく中に、彼が無批判に相手を受け入れすぎた、と難じる人も中に

はあるかもしれない。私は左右は思わな
い。彼は只純一であつた丈だ。彼は只自
分の心を一部分も秘さなかつた丈だ。だ
から彼の心が彼程傷つけられたのは、彼
に非があつたというよりも、事実として
当然の論理があつただけのことと私は思
う。

其日私は彼とバイトに出て居た。彼は
全たくいつもの調子で、なにか変事が
あつたとは全然思えなかつた。帰る段に
なつて、私と彼が一人になると、彼が
きよう飲まないかと突然誘つて来た。私
は特に異存もなかつた。私達は居酒屋に
這入ると、彼が実はと現状を打明けてき
た。三日間、彼女から音沙汰がない。約
束していた彼の室で料理を作るといふ件
に就いて、三日前に彼が彼女に折簡を
送つたという。バイトの予定が立つて、
俺はこの日が空いてるけど、秋山さんは
どう、と質問した折簡だつた。しかし丸

一日以上、返事が返って来ない。彼は奇体おかしいな、と思い電話を試してみた。出ない。彼は段々と不安になった。まさか、事故にでも会あったんじゃないやあ。彼は墓ぼ蝦からしいと思いい乍なから不安を払うことが出来なかつた。折簡メールが返って来ないだけでなく、電話をした事に対しても、また丸一日以上何の応答もなかつた。彼は不安を募つのらせた。もし、事故にでも遇あつて、なにかあつたら、俺は何うすれば宜いいんだ。家の場所も、電話も知らないで、俺は彼女に何ができる。彼は悩んだ。彼の憔悴しょうすいした様子に私は驚いた。バイトの時の常態じょうたいとは懸かけ離れていた。携帯電話つていうのは、何なんでこんな軽いんだらう。便利なだけで、いざつていう時、なんの力にもならないじゃないか。私は悲観の熄やまない彼に、取敢とりあえず、もう一度電話を掛けてみないと勧めた。彼はじゃあと席かを立ち、直すくに戻つて来た。やっぱり、出な

い。彼は進退が窮きわまった人の様に立ち竦すくんでいた。どうしよう、奇お体かしいだろう、彼は青ざめた顔で隻語つぶやいた。私は彼を慰藉なだめた。なにか、事情があるのかも知れない。携帯を何所どこかに忘れてるのかも知れないし。そう言うと、そうだね、まあ、待つしかないかと彼はもらした。

その内うち一通のメールがきた。彼女からだった。「ごめん、彼氏が出来た」という内容だった。クリスマス約束をして、彼の家に行く約束をして、一週間もたっていないなかった。重ねられた「ごめんね」という語ことばに、彼は呆然として自失した。

……

五

其その次に彼と会ったのは、二日後だった。彼はバイトのあいだも至いたって普通だった。しかしあれ程憔悴しやうすいしていながら、

じょうたい よそ
常態を装おえる彼を一度見たので、私には彼の心情が判断出来なかった。私は彼と会わない間、彼の「始めて好きになつてももらえるかもしれない」という言葉を何度か思い返した。夫には彼の表情も伴なつた。私は苦痛を感じることもなかったが、ただ彼が今どうしているだろうと考へた。

直後にバイトの飲会のみかいがあつた。矢張りやは苦しかつたのだろう、「失恋しちゃつてさ」と彼はバイトの同僚に冗談めかして話した。然し秋山さんは元ここのバイトといふことで、一応名前は伏せた。秋山さんと接触があつた事を知つていたのは私だけ丈なので、私は黙つた。彼は秋山さんの下の名前てんまつのイニシャルから、Kさんとして顛末を話した。女の子は非ひどいと同情する子もいた。おれの友達なんて、もっと非ひどいよと慰なぐさめなのだろう話をする人もいた。

その話をする彼は痛々しかつたが、夫（それ）でも当夜の動揺振（ぶ）りよりは増（まし）だつた。おれの、此（この）やり方が間違（まちが）つてゐるんだらう。彼は青ざめた顔で酒を呷（あ）つた。好きつて突然いわれるのは、重（おも）いんだらうなどはわかっているよ、でも、俺にはこのやり方しかできない。世間並（せけんなみ）のやり方にしたつて、世間並の恋人しかできないじゃないか。世間並の恋人とつき合い、世間並の恋人を求める私は彼に掛（か）ける言葉がなかつた。彼は独語（ひとりごと）やいた。俺は、至誠（しせい）に従（したが）いたい丈（だけ）だ。相手（たがひ）におし付けるんじやなく、相手に只（ただ）実意（じつい）をみせることに困（こま）つて、自分の至誠（しせい）に悖（もと）りたくない丈（だけ）だ。俺がいま迄（まで）此（この）やり方で傷（きず）つたのは、単（ただ）に運（う）が好（よ）かつたんだらう。ああ、でも、此（こ）んなに蟊（ば）蛾（か）にされるなんて、想像（さうぞう）したこともなかつた、……彼は又（また）酒（さけ）を銜（く）んで、ばかだから、ばかにされる丈（だけ）かと独語（ひとりごと）いた。

のかと思つた。しかし彼の反応は素早すばやか
つた。否々いやいや、失恋した男が行つても白け
るだけだつて。やめといたほうがいいよ。
私は彼の顔が瞬時かたも変らなかつたのに驚
ろいた。彼は、もう自分の中で整理をつ
けてしまったのかとさえ怪しんだ。女の
子は答えた。えー、でも、こういうのは
吐き出せる時に吐き出しちゃつた方がい
いですよ。まあ送別会は来週なんで、気
が変かわつたら来て下さいね。彼は笑い乍ながら
まあ考えとくかなといつた。

送別会には私も誘われた。ほんとには少
人数でやる積つもりだつたんですけど、Mさん
とOさん（之これは私の名だ）なら問題ない
ですよ。参加する人をきいてみると、確
にみな秋山さんと比較的仲のよかつた人
達たちだつた。私は、やだMが行かないなら
俺おれも行かないと、姿しなを造つくつて駄た々だをこね
た。突然の恋人気どりなんなの!? しか
もちよつと重い感じやめるとMは私を突

き離した。皆が笑った。私は不意になんて安い道化なのだろうという思に擒らわれた。それにMを巻き込んだのだという思が、なぜか始めてした。

その飲会はその儘終った。私は彼と話す機会もなく別れた。だから数日後、彼が送別会にやはり参加したい旨を告げたのを聞いて、彼の心が何んな変転をとげたのかを今も想像することしかできない。

六

送別会の日迄、私は彼とそれほどバイトの日が重ならなかった。同じバイトの日になっても、深刻な話をする機会はとくになかった。私は後から此一週間程の空白を想像して、或は彼は一人きりの室で苦悶を反復したのかもしれないと考えた。天為の儘の愛情を、彼女の気随に因って損なわれた。私の想像は貧相な

ものだった。しかし散々期待させられた挙句、彼氏を作って逃げられたという解釈でなら、屈辱という名を与えて私にも理解ができた。

彼が参加することになったので、私も加ることになった。私はそれとなく彼に平気なのかと訊ねた。彼は、まあ、そうだねと苦笑する丈だった。彼の様子にとくに気負った所はなく、私も彼の変心にさして重大な意味はもたせなかつた。其頃は私も自身の女性関係に故障が生じていて、其所まで突込んで彼のことを考える余裕をもたなかつた。だから私は、彼の心意を察することもなく、程経ずして送別会の日を迎えた。

私は彼がどのような応対をするのかと、最初は阻和々々としていた。もし険悪な氣氛になったらどうしようと気を揉んだ。しかし、彼は融和的な態度でこの場に臨んだ。最初に彼を見た秋山さんは顔を

硬張こわばらせた。彼が来ることは、矢張やはり聞いていなかっただろう。一瞬、幹事をやっている女の子に目を走らせた。彼は莞爾にこにことして言った。お久し振おひです。急に参加することになっちゃってすみません。彼女は、とりあえず笑顔を作り、ああ、いいのよ、大丈夫、といった。

彼女からしたら、謀議ぼうぎの末すえ此送別会このせいはいが設しかけられたのではないかと、疑うたがってもあるべきだろうと私は思った。しかし実際は彼と彼女の関係を知っているのは私丈ただだし、女の子の一人はまだ一か月だけど、全然会ってない感じがする。元気してたたと心しんから再会を喜よみこんでいた。

私達は居酒屋へと移動した。人員は六人で、六人は整然きつちり六人掛がのテーブルに収まった。私は片側の真中まんなかにいて、其隣そのりにいる彼は、秋山さんと対むかい合っていた。皆みんなな意図もなく座った丈だけなので、秋山さんと対むかい合うことになった彼が不幸なの

か、夫^それとも彼と対^{むか}い合うことになつた。秋山さんが不幸なのかと私は考えた。然^{しか}し考え様^{よう}によつては、皆^{みんな}なで話している時お互^{たがい}を視界に入^いれずに済むのが、まあ便宜といえれば便宜だろうとひとりで納得していた。

最初、秋山さんは彼と目を合^あささないよう力^{つと}めているようにみえた。話^{はな}しの流れで、彼と語^{ことば}の遣^{やり}取りをする時も、横目でちらりと目を合^あわせる丈^{だけ}だった。しかし酒が進むにつれそれも和^{やわ}らいで来たようだった。彼は固^もより明るかつた。その彼の態度が、幾分かでも安意^{あんい}を与えたのだらうと、私は思った。最初^{はじ}はぎごちなかつた笑^{わら}いも、彼が冗談^{じやうだん}を連発^{くりかえ}すことで、段々^{てだんだん}手放^{てはな}して笑うようになった。

機^きが熟したと見たのか、彼女と仲^なの可^いい女の子が、そう言えば、秋ちゃん、ね。と含^くみをもたせた発言をした。外^{ほか}の子がそれに喰^くい付いた。なになに、どうした

の。秋山さんは、あまりいい顔をしていなかった。私もいい予感はしなかった。女の子は案の通り、彼氏、できたんだよねと告発した。

えー、いつの間にーと一人の女の子が歓声をあげた。私と彼でないもう一人の男の子が、なになに、何んな人っすかと割って入った。話しが盛り上がりそうになつたので、なぜか私は焦り己おれも、彼女できたんだよと叫んだ。焦った儘まま続けた。まあ、嘘だけど。なんで嘘ついたの!? 彼が隙すかさず間あいの手を入れた。っていうか、元々お前は彼女いるだろう。私は是これで本式に会話が發展せずすみはしないものかと、内心冷々した。

私と彼が平常もの調子だからか、彼女はそれほど平調を崩さなかった。ただ、うん、まあ、と答えただけで、話はやがて外方わきへ流れて行った。私は安堵したが、私はなにを此こんなに惧おそれているのかと怪

しんだ。すると、彼折簡あのメールが来た日の彼の様子を思い出した。私は、もしかして、彼が傷つくことを恐れているのではと思ひ出した。然し真相はわからなかった。私はトイレに立った。

私は彼がすでにトイレにいつていたところに、トイレのドアの前に来て気づいた。此所のトイレは個室で、一人ずつしか這入ることができなかった。私はドアの前で逡巡しゆんじゆんした。彼が出て来るまで、まつか。其中、中でゴツンという音がした。怪訝けげんに思うと、亦またゴツンという音がして、衝撃が糸わすかに伝わった。壁を殴る音だと心付いた。其所で聞き耳を峙たてると、中から「糞……」という声が聞えた。

私は用を足さずにテーブルに戻った。彼は固もとより酔っていた。左そして私も。みな、上機嫌にみえた。トイレから戻った彼は尚なおのこと上機嫌だった。私は彼のことを正視せいしするのに堪え得なかった。再び

トイレに立つと、近いっすねと、後輩の男の子が私を戯言からかった。

七

宴えんは竟おわりに近づいた。終電までにはまだ時間があつたから、この次つぎにどこにいくかという相談になった。カラオケ、ボーリング、また飲屋のみやといくつか案が出たが、確定はしなかつた。そうこうしてゐるうち、又話またはなしに華はなが咲いた。

私達を誘ってくれた女の子が、思い出したように彼の話を振った。そう言えば、秋山さん、聞いてあげてくださいよ、Mさんの悲かなしい話。後輩の男の子が喰くい付しいた。そうそう、Kさんっていう、性しょう悪わる女おんながいてね。Kさんというのは、御前おまえの目の前の、その人だよ！ 事情を知らないとはいえ、軽薄に話しを盛り上げようとすると後輩に、私は内心で叫んだ。

いつもの彼だったら、いやいやと言いつつ何としても其話しに入るのを拒否したのではないかと私は思った。しかし、彼はにこにこして誰をとめる気色もみせなかつた。秋山さんの顔は、不穏な予覚を感じたのだらう、僅かにだが曇つた。私は白状すると無様な様だが、どうしていいか分らなかつた。先程の様に強引に話を杜絶させるには、機を失していたし、何方にしろ酔いが思考を妨たげていた。私はどうしたらいいものか分別がつかなかつた。私は恐る恐る彼を見た。

彼は徐ろに立ち上つた。音もなく立つたので私は驚倒いた。彼は真直秋山さんに指をさした。「おれの好きな人は、秋山さんだ」

私と、彼女と、彼以外の三人が呆氣にとられてるのがわかつた。私は語を失ない、彼女の顔は硬張り、彼は普段の儘の笑顔を湛えていた。私は、彼にとって

の笑顔とは、自分が知覚できないようなほんの少しの意思で発現してしまうほど、容易なものなのだと思つた。私はこれまでの彼の人生を思つた。あの自信のなさを思つた。しかし私には何事も知り得なかつた。只彼は彼女のほうへと歩を進めた。彼女は身を竦め、然し目は彼から離せないようだつた。

彼は彼女の項を掴んだ。そう荒々しい感じでもないが、ここからでは力加減は分らない。彼は一度深呼吸して、笑顔を引き込めた。左右して言つた。「俺はきよう、貴方に復讐に来た」物騒な言葉が、一瞬店内を寂とさせた。

「おれは貴方を、許さない。貴方は俺の愛情を、不様な俺の中で唯一の純一なもの、傷けた。何で期待させた？ 何で拒否しなかつた？ 何で、俺から逃げた。俺の愛情から貴方は逃げたんだ。それが一番残刻な遣口だつてきづかずに。

彼氏ができたんなら、なんで夫それを俺に説明しなかった。期間が短みじかかったからか？ おれを傷きずけると思おもったからか？ ちがうだろう。愛のためなら、すべてを犠牲にしても、しかたないだろう。なんで俺にメールを返さなかった。会あって事情を説明しようとしなかった。俺が電話しなきゃ、貴方あんたは其儘そのままのうのうと彼氏と仕合しあわせな時間をすごしていたっていうのか。なんで何日も連絡を寄よこさず、俺から目を背そけつづけたんだ」彼女が思わず顔を伏おせた。彼は叫こんだ。「俺を見ろ！ 之これれが俺の愛情だ。俺の不し様な愛情だ。貴方あんたが傷きずけたものの、是これが正し體たいだよ。俺は自分の中の、好きっていう気もちを、唯一の純粹なものを、無視むされたんだ。愛の犠牲ぎにされたんじゃない。ただ、ないものとして扱あつかわれたんだ。なんで貴方あんたの愛の犠牲ぎにしてくれなかった。なんで傷きずけるなら、もっと正面まへから傷きずけて

くんなかった。彼氏のこと好きなんだろう。だからつき合ってるんだろう。だって、正面から、愛の邪魔になるものを取払とりはらわなきゃ仕方ないだろう……」

私は彼をとめべき立場にあった。私はそれを自覚していた。しかし私の體からだには動く気色けしきが感じられなかった。私は彼の鞞はしのをみていた。左そうして彼の振り下す鉄槌つゐの音を聞いた。彼の好きと、私の好きがちがったように、私の屈辱と彼の屈辱もまた同じでないのだろうと私は思った。彼は続けた。

「此様こんなのは、意味のない、復讐ふしうだつて分かってる。でも俺は貴方あんたに復讐ふしうがしたかった。せずにはいられなかった。そうしなきゃ俺の好きがどこにも出ていかねえんだ。貴方あんたに堰せき遏とめられた気持きもちが、俺の中で暴れて気が狂いそうになるんだ。俺は道化どうけだから、どこにいたって、笑っていることはできる。でもそんなのは俺

じやねえんだ。貴方あんたを好きな氣持丈きもちだけが、俺の本當ほんとうだったんだ。俺の本當ほんとう……もう、なんの意味もないもの……」彼女が泣き始めたのをみて、彼は失速した。彼女の首から手をはなした。「こんなになつても、貴方あんたとまだ続きがあるんじゃないかなんて、考えることがある、——笑えよ。始めてはじめて女の子にふれる時は、最度もつと優しくしたかったなんて、いまも考えてる……」彼はポケットに手を入れ、財布をとり出した。その中から紙幣を無雜作むざうさに攫つかむと、テーブルの上に置いた。「みんなには迷惑めいわくを懸かけた」一目いちもくするだけで、其額そのがくのきよ金の代あきらり明かに多いのがわかった。彼は蕭然しょうぜんと場を去った。彼女は声をあげて泣きはじめた。惶あわてて彼女を慰藉なだめる者、放心なごみしてなにを考えているのかわからない者、事態を收拾しゆじしようど今更焦いまさらる者がいたが、彼を追うべきだったかもしれない私は、彼女の涙が、

自分の不義への後悔でなく、尋常でない
場面に際会した恐怖からきているのだろ
うと考えて、茫昧りと彼の遺した紙幣を
見つめた、……

八

夫から、私が彼と同じ日にバイトに這入つたのは、数回しかなかった。私は其のた
びに、彼に一所に帰ろうと屹度言ったが、
彼はさびしげに笑って私を待ってくれる
ことはなかった。

バイト場の雰囲気として、彼と距離を
置こうという空気ができあがっていた。
当夜の話が何程の早さで滲透したのかは
わからないが、私がきづいた時には大抵
の人間が話を知っていた。失恋時は彼に
同情的だったアルバイトの評価は、あれ
は重いよ、という人から、でも、なんか
可哀そうだった、という人まで、各個に

違う感想を与えることとなった。

彼が罷めたのは直だった。社員の人に話を聞いて見ると、送別会にいく前には今月限りで罷める旨告げられていたそうなので、覚悟をきめていたものとみえる。私はやめる前に彼に是からどうするのかと訊いた。彼は、さあ、何うするか。就職するかもしれないし、又バイトをするかも。と答えた。

後悔してないか、彼が帰ろうとする間際を引き留めて、私は質問を重ねた。後悔？ 彼は感情の溷濁した顔をした。正直、何も分かんないんだよ。只、おれのことだけは、本当に意味がなかったこと丈はわかった。彼は私をみているのかもわからない目をして、そう言った。

彼が与えようとした愛による損傷は、あるいは彼を最も傷けたのかもしれないと私は思った。夫に引き較べて、彼女のほうはどうだろう。私には当時もいまも

判断がつかない。唯、前提がまちがっているのではと思った。彼女は、自身の愛情に已やむなく流されて彼氏を作ったのではなく、場当りばあた的な男女の情に流されて彼氏をつくったのではないか。私は自分と其経験そのからでしか判断することができなかった。そこで疑うたがった。

彼にも夫それが分わかつていたのかどうか。今となつては、確認する方ほうはない。彼がやめたあとと一月ひとつきもせず、私もそのバイトをやめた。就職活動をはじめた為ためだ。いまは、彼日あのから丸一年が経たとうとしていゝる。私は就職先の内定を取り、別のバイトをして日をすごしている。彼と再会したことは無論ない。彼がどうしているかという話も、聞いたことがない。抑々そもそもあのバイトの人で、今も交流がある人間がひとりもいなかった。電話番号を知っているのに、だ。

私は、電話番号を知っている外ほかの多く

の人間より、いまは一切の絆つながりをなくなして仕舞しまった彼のことを、屢しばしばこうして思い出す。その原因は分わからない。或あるは、只ただ失ったものを求めているという丈だけのこともかもしれない。しかし、私は彼の猛烈な愛情が好きだった。彼の処世用の顔と、愛情用の顔の齟齬そごが好きだった。私は彼の歪いびつな彼其物そのものを、私が出会った人間のなかで最も人間らしいものと認めた。

私は最後に、大抵彼女の事に思い至る。私は拗ねじているので、どうしても彼女があの日のことをどう解釈しているのかと考える。彼女は、自分が傷つけた彼の愛情によって、本当に損そこなわれたらどうか。筋違いの非難をされたら、四圍まわりに洩もらしてはいないだろうか。いや、彼女が実意のある人間で、彼とのことを心しんから後悔しているのでしょうか。……然しかし、其傷そのは、もう今は癒えているのだろうか。……彼とこのことを思い出すこともなく、亦新またあたらし

い恋人と朝を迎えているのだらう……此
想像は、矢張私の拗けた性質のためだろ
うか？

傷が癒えるということ、私はこの一
件以来恨むことが時々ある。人は癒しを
求める必要さえなく、大抵の傷をいずれ
は塞いでしまう。私は、彼が消えない傷
を残したかったのではないかと想像する。
消えない、心に残した赤い傷……其結果、
彼は彼女よりも深傷を負った。彼が与え
た愛の損傷、あれは、私にさえ累を及ぼ
して、しかし彼が望んだ何物をも彼に与
えなかつた。